研究主題

「未来を拓く社会科教育」

～知識・技能を習得し活用できる児童生徒の育成～

1．はじめに

本会では平成８年度より研究主題を「21世紀を拓く社会科教育」とし、平成12年度からは小主題を「たくましく生きる力を育てる社会科の創造」として３ヵ年の継続研究を進めてきた。平成15年度からは、同じ研究小主題のもと「多様な表現力」、平成18年度からは「自己決定力」、平成21年度からは「言語活動力」に焦点を当てた研究・実践を行ってきた。また小学校では昨年度から、中学校では今年度から新学習指導要領が改訂されることとなる。

現在、テロや国際紛争、世界的大不況など、国際情勢は緊迫化し、同時に世界的規模での環境問題に対する対応の必要性が高まってきている。また、インターネット等の普及により膨大な量の情報がリアルタイムで身近に溢れ、これまで以上に複雑な社会となってきている。このような時代に生きる児童生徒が解決していかなければならない問題（課題）は山積していると言える。

これらの問題を解決していくために必要となるのが「知識・技能を習得し活用できる」ことである。今次研究では、児童生徒が如何に知識・技能を習得し、自らの問題解決力を高め、活用していくことができるのかを、日々の実践の中で追究していきたいと考えている。

2．研究主題にかかわって

未来を拓く社会科教育

(1) 加速的に変わってきた社会

20世紀は科学技術の発達が目覚しく、工業や医療など人々に計り知れないほどの恩恵をもたらしてきた。その一方、かつてないほどの大量のエネルギーが消費され、地球温暖化など、多くの環境問題が地球を脅かすほどにもなってきている。その解決に向けては、もはや一国では解決できない時代がやってきた。「宇宙船地球号」の一員として、単に我が国だけの対応ではなく、よりグローバルな視点で対応していかなくては解決の糸口は見えてこない。さらに交通の発達によるモノや人の流れが国際化し、新型インフルエンザの世界的な流行など身近な日常生活まで及び、否が応でも世界の中の日本を意識しなければならなくなっている。これから先の社会の変化を考えるとき、さらに変化が加速され、先行きは不透明である。

(2) 激しい変化の社会を主体的に生きるには

生活を変える新たな発明は、人々に多くの利便性と利益をもたらすと同時に、予想外の負の影響も与えることが多い。例えば、自動車の排気ガスが地球の環境破壊につながることを誰が予想したであろうか。そのような時、私たちは社会をしっかりと見つめ、一人一人が主体的によりよく問題解決をしていかなければならない。これからの未来は、これまでにないほどの大きな変化が見込まれる。この変化の激しい新しい時代に対応した教育の在り方が問われている。未来を生きる児童生徒には、よりよい社会を主体的に考え、自ら働きかけ、創りあげていける力の育成が一層大切となる。

これからも起こってくるであろう社会の急激な変化に対応し、問題解決に必要な様々な力を「未来を拓く力」とおさえ、「未来を拓く社会科教育」を研究主題とし、３ヵ年研究を深めることとした。

3．研究小主題にかかわって

知識・技能を習得し活用できる児童生徒の育成

(1) 直面している問題

21世紀に入り、未来に生きる私たちにとって、すでに多くの問題が山積している。

- 国際化社会が進み、もう自分の国だけでは産業も文化も成り立たなくなっている。
- 科学をはじめとする技術革新が一層発展し、革新に伴う再教育が一般的に行われ、生涯学習社会が進展している。
- コンピュータの発達がもたらした高度情報化社

会の中で、溢れる情報を主体的に選択活用することが大切になってきている。
・先進国では高齢者の割合が増え、深刻な高齢化社会が進んでいる。
・工業化が進み、それに伴う大気や水の汚染、オゾン層の破壊、温暖化などの地球環境への配慮が一層大切になってきている。

世の中がどんどん便利になり、モノが溢れるほど豊かになってきた反面、高度に工業化・情報化し、分業化された社会では、自給自足の社会のように自分だけでは生活できない。ごみ処理問題一つ捉えても様々な立場から、様々な主張がある。

更に国際化が進んでいる今日、宗教や習慣の全く違う国の人間同士が隣り合わせで生活しなければならず、価値観の違いから様々な問題も起こってくる。

また、高齢化とともに少子化も問題になってきている我が国にあっては、表現力を中心とした児童生徒のコミュニケーション能力が低下しているという指摘もされている。

(2) 激しい社会の変化を主体的に生きるには

児童生徒は、このような社会の現実に直面しながら、未来を生き抜いていかなければならない。そのためには、様々な主張や価値観をそれぞれ理解したうえで、自分なりに考え、判断し、表現していく力が是非とも必要である。一人一人の思考力、判断力、そして表現力が求められているのである。

主体的に未来のあるべき姿を考え、行動するには「ものの見方」や「感じ方」「考え方」「生き方」に心豊かな人間性を備えていることが大切である。同時によりよい社会を切り拓くための方法・手段にかかわる能力の育成も重要かつ不可欠である。

これらのことについて、私たちは平成12年度から「生きる力」として、これまでの研究で実践を積み重ねてきた。今次研究では、これらの研究を踏まえて、「知識・技能を習得し活用できる児童生徒の育成」を研究小主題とし、「思考・判断・表現」する力を中心に、3ヵ年研究を進めていくこととした。

(3) 知識・技能を習得するためには

児童生徒が「知識・技能を習得できる学習」を構成するためには、本時（単元全体）で身に付けさせたい力をはっきりさせる必要がある。そのためには、調べたことが生きる課題設定をもとに学習を進めることが大切である。それに併せて、資料活用能力も育成していく必要がある。調べたことや資料から読み取ったことを根拠とし問題解決していく学習をすることで、知識を習得させていくことが重要である。

また一人一人に、調べる場をしっかりと保障することも大切である。各自が考えをもつことで、「思考力」が育ち、その意見をもとに交流することにより、「判断力」や「表現力」が育つ。そうすることにより、知識・技能が習得されていくと考えるのである。

(4) 習得した知識・技能を活用するためには

習得した知識・技能を活用するためには、見方・考え方をもとに社会事象の意味を理解していくことが必要である。この時、資料活用など今までに習得した知識・技能を本時の問いと結びつけながら考えさせるようにする。「あの時こうだったからきっと～」「～の時と比べると…」など、それまでに習得した見方を一般化して、活用できるようにさせたい。

しかし、ここで注意しなければならないのは、「知識・技能」の活用は必ずしも手立てが先にくるものではない。児童生徒が確かな力を育むための方法や、学習展開を工夫することが大切となる。

また、板書構成や発問など、教師のかかわりも吟味する必要がある。考えをまとめたり、友だちの良さを見つけたりする思考力・判断力を生むことに繋がると考える。

4．研究推進計画

(1) テーマ設定の理由

今回の学習指導要領にある『知識基盤社会化やグローバル化が進む時代にある今こそ、世界や日本に関する基礎的教養を培い、国際社会に主体的に生き、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成する』ために、

○基礎的・基本的知識、概念や技能の習得
○思考力・判断力・表現力等の確実な育成
○言語活動の充実
○社会参画に関する学習の重視

が必要とされている。また、社会の変化に主体的に対応していくためには、これまで以上に社会的な見方や考え方を養うことができるような授業を工夫し

ていくことが求められている。

本会では、これまで「生きる力」を追究する中で平成15年度から「多様な表現力」、平成18年から「自己決定力」、平成21年からは「言語活動力」に焦点を当てた研究・実践を行ってきた。

「表現力」とは、本会では人間の創造的な生き方の土台をなす大切な学習要素であり、表現力の育成は児童生徒の知的発達や理解力とも深くかかわっていると捉えている。さらに「表現力」は具体的な学習活動の中にあっては、情報の発信や伝達、協同的思考、価値の共有、発表の場面などにおいても果たす役割は大きい。

「自己決定力」とは、本会では事実をしっかり捉える力と事実に基づいて考える力をもとに価値判断できる合理的な意思決定力とおさえている。児童生徒は問題解決に向かって、自分なりの見方、考え方を交流し、自他の比較を通して自分の考えを再構成していく。つまり「自己決定力」は、人間の生き方の土台をなす大切な学習要素であり、児童生徒の知的発達や理解力とも深くかかわり、行動とも密接に結びついている。

「言語活動力」とは、本会では、『社会科における言語活動』として捉えており、①社会事象の意味を理解する。②社会事象の特徴を関連付ける。③お互いの考えを高め合う。の３点と押さえている。また、交流を通して各自の考えを再構成することで、「目標分析」と「課題の質」を追究していく必要がある。

これまでの研究で見えてきたことは、これらの力をもとにして、知識・技能を確実に習得し活用させることが必要不可欠となるということである。

社会科で習得させたい知識・技能には社会科固有の知識や技能であると同時に『実生活において不可欠な知識・技能』と『学習を進めていく上で基盤となる知識・技能』という２つの側面を併せもっているといえる。

しかし、社会科では知識や技能を個別に切りだして教え込むといった学習ではいけない。社会生活を総合的に理解し、国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養うことを目指す授業を展開する中で、必要感をもって、児童生徒自らが主体的に学びとっていく必要がある。

そこで、新指導要領でもいわれている通り「全ての学年を通じて、知識・技能を活用して考える力や表現する力」を育てる問題解決的な学習の充実を図っていく。その際、学習問題に即して調査したり資料を活用したりして調べることや、調べたことや考えたことを表現し説明する必要もあると考え、研究を進めていきたい。

⑵　具体的な推進計画

○１年次の研究（平成24年度）

児童生徒の「思考・判断・表現」する力を培う学習展開

思考力・判断力・表現力を培うためには、まず自分なりの見方・考え方を一人一人がもつことが大切である。そのためには、普段から社会事象との出会いを通して、子どもたちに主体的な学びを確かに確立させることが必要となる。そうすることで、興味・関心や知的好奇心の連続的な高まりと広まりが見られるとともに、児童生徒の学ぶ切実性が高まり、自力で個性的な追究ができるという自信を積み重ねることができると考えるのである。

また、知識が思考・判断のための手立てとなることによって、それが生きた生活の知恵となったり、児童生徒の生き方にかかわるものの見方・考え方を生む重要な役割を果たしたりするものと考える。それらは、知識・技能を習得し活用することとも繋がってくる。

そして表現活動は、観察・調査や体験など、他の学習と効果的に組み合わせることによって、思考・判断の吟味の場となり、方法にもなりえると考える。

研究初年度の今年度は、これらのものの見方・考え方を自分なりの手立て・方法で表現させていくような学習展開の成立を重点に研究していく。

○２年次の研究（平成25年度）

児童生徒の「思考・判断・表現」する力を高める学習展開

思考力・判断力・表現力を高めるためには、一人一人が明確な問題意識をもって追究していくことが大切だと考える。すなわち、思考・判断と表現との関係を明らかにし、その中での新しい学力の高まりをその子なりのよさとして認め、児童生徒一人一人の新たな意欲と自信に満ちた自己表現をさらに図っていくことを目指していく。

「自己表現」の前提として一人一人が「自分なりの考え」をしっかりともつこと（主体的な判断力）が重要であり、そのためには課題設定を身近なもの

とし、思考・判断の前提となる基礎基本の裏付けが大切となってくる。この中で、児童生徒は資料を収集・選択・活用したり、調査活動等を行ったりしながら自分なりの見方・考え方を醸成しながらまとめていくことが必要となる。思考・判断したことを自分なりの表現方法を用いて集団の中で表現し合えるような交流の場を設定することを大切にしたい。

この中で、自他のよさに気付き、互いの見方・考え方を表現する活動を通して評価し合うことから、思考や認識を広げ、深めていくことができる。これが、『「思考・判断・表現」する力を高める』ことに繋がっていくのではないかと考えるのである。

思考と判断、表現の繰り返しや積み上げによって、より「主体的な判断」となり、「豊かな自己表現」がなされる。一人一人が自分の考えをもち、その考えを他に知らせ、他者の考えを知るといった、より確かな考えに高まるような学習展開を研究していく。

○３年次の研究（平成26年度）

児童生徒の「思考・判断・表現」する力を生かす学習展開

３ヵ年研究のまとめの年であり、１～２年次の成果を生かし、検証する年である。

思考力・判断力・表現力を生かすには、交流の場、つまり表現活動の場の工夫が大切である。児童生徒は、問題解決に向かって自分なりの見方、考え方を交流していく。そこで、自他の見方、考え方の類似点、差異を認識していく。自他の比較を通して他の見方・考え方を尊重しながら、自分なりの見方・考え方を再構築すると同時に、その表現方法についても自分なりに判断する。つまり、個と集団の学びが融合していくことである。このことにより、認識に広がりや深まりが生まれるとともに、そこから新たな問題が生じる。それを自分なりの追究方法・表現方法で解決していこうとする。その中で、確かな『知識・技能を習得』させるとともに、社会的事象の意味を理解させながら、本時の問いと結び付けて考え、活用できるようにすることが大切になる。

このように、個と集団の学びの融合を通して、「思考・判断・表現」する力を生かす学習展開の成立を研究していく。

⑶　３ヵ年の研究を貫くもの

知識・技能を習得し活用できる学習にするためには、特に次の３点が研究を支える土台と考える。

○問題解決的な学習を授業構成の柱として重視する

主体的に社会参画するためには、主体的に問題解決する態度や能力を身に付けていかなくてはならない。したがって、学習も問題解決的な授業構成とし、児童生徒の学び方が身に付くようにする。問題解決の流れを、本会では次のように考えている。

つかむ（予想する）	・児童生徒が問題に直面する。 ・自分の問題として明確にする。 ・問題解決の手順や計画を立てる。
調べる（多様な方法で）	・予想をもとに問題解決に必要な資料を集める。 ・集めた資料をもとに自分の考えをもつ。
確かめる（自分のものとして表現・判断）	・考えを交換し合う。 ・集められた情報をもとにして、問題解決を深化させたり、修正したりして他の対象や事例にも応用できる知識や技能を身に付ける。
広げる（発展）	・新たな疑問やさらに深めたいことへの挑戦意欲をもつ。 ・自分の学びを見つめなおす。

○体験や活動を取り入れた学習にする

問題解決をより強化するものとして、体験（疑似体験も含む）や活動を取り入れた学習にしていく。体験や活動を通すことで、学習が楽しくなり、やりながら問題解決力を身に付けていく。五感を通して身に付けた力は、実社会においても主体的にかかわるための力となる。

○自分の学びを意識させる自己評価と相互評価

自分の学びを見つめ直し、よりよい学び方を身に付け、自分を変えていけることが、主体的に社会にかかわっていく力を高めていくことになる。

自分の学びを見つめ直す方法には、ノートやカードに書いたり、感想を出し合い交流したりするなど様々な形態が考えられる。また、自己評価や相互評価があり、どちらも意欲を高める大切なものである。評価の視点には、学び方にかかわるものと問題意識にかかわるものとがある。前者はより深く見つめる問題解決する力に繋がり、後者は社会をより深く見つめる眼を育てていく。ともに社会に主体的にかかわるための力となる。

5．研究構造図

研究主題

未来を拓く社会科教育

★到達目標

研究小主題

知識・技能を習得し活用できる児童生徒の育成

★目標に到達するための前提

・児童生徒の問題解決力の高まり
・豊かな人間性

★３ヵ年研究を貫くもの

問題解決的な学習

体験や活動を取り入れた学習

自分の学びを意識させる自己評価と相互評価

★３ヵ年の取り組み

社会科としての基礎・基本

１年次：児童生徒の「思考・判断・表現」する力を培う学習展開
２年次：児童生徒の「思考・判断・表現」する力を高める学習展開
３年次：児童生徒の「思考・判断・表現」する力を生かす学習展開

中学校における具体的手順

1．はじめに

今年度から中学校でも新学習指導要領が完全実施となった。平成20年１月の中教審答申には、今回の改訂に至るまでの背景や、それに伴う我が国が求める学力観が系統的に示されている。大まかにまとめると、ＯＥＣＤによるＰＩＳＡ調査や全国学力・学習状況調査から、「読解力が低い」「活用問題の正答率が低い」「記述式問題の無回答が多い」等の課題が明らかとなり、それらを克服するために、『習得した知識や技能の活用学習』『問題解決力の育成』『思考力・判断力・表現力等の育成』が重点化された、ということである。

学力観というのは、その時代背景によってかわってくるものであるが、今、求められている上記のような学力観は、［新卒採用→長期雇用＋企業内教育］という日本の従来のシステムが崩れてきている産業界においても、求められている力である。しかし、この学力観に、保護者も大学もついて行けていないのが現状ではないか。ひょっとしたら、我々教師の中にも。「子どもにこういう力が必要だ」という発想ではなく、「点数をあげる」「成績をあげる」といった保護者の意識が強い。大学を卒業しても就職できない昨今にあって、求められている人材がどういうものなのかがわかっているはずなのに、大学入試システムにも大きな変化はない。そうした世の中で生き抜く力＝実社会・実生活に生きてはたらく力が必要とされている。このように、我が国そのものの現状を把握していくローカルな視点を踏まえながら、グローバルな視点に立って、教育活動を行っていく必要がある。

このような現状を踏まえながら、『知識基盤社会』において、『生きる力』を育むことを目指し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育成するとともに、主体的に学習に取り組む態度を育成することのできる社会科教育の在り方を、本会の研究主題『未来を拓く社会科教育』、研究小主題『知識・技能を習得し活用できる児童生徒の育成』を切り口に探っていきたい。

2．研究主題・研究小主題のとらえ方

研究主題『未来を拓く社会科教育』

「未来」とは何か。そして、その「未来」を「拓く」とはどういうことか。中学校部会では次のように捉えることとした。

「未来」というと、「現在」から遠い先のことをイメージしてしまいがちだが、そもそも「未来」とは現在の延長線上にあるものである。つまり、「今」をどう生きるかによって「未来」は創られる。よって、先に述べたようなローカルな視点や、グローバルな視点によって浮かび上がってくる「今」、そして、『知識基盤社会』に対応していくべき「今」を生き抜いていける生徒の育成を図っていくことこそ、『未来を拓く社会科教育』につながると考えた。

また、社会の変化に対応し、「今」を生き抜いていくためには、主体性が必要である。主体性は自分の意思を明確に持ってこそ、生まれてくるものと考える。例えば、最近の報道番組のインタビューによる世論の受け答えを思い浮かべてほしい。「自分なりの言葉」では話せるが、「自分の言葉」ではなかなか話せないという人が多いことに気づく。それは生徒にも言えることである。したがって、良い悪い、好き嫌い等、社会的事象についての考えを、‘感情’によって、「自分なりの言葉」で表現するのではなく、根拠を持って、自分の‘意思’によって、「自分の言葉」で表現することのできる生徒を育成していきたい。その‘意思’に基づくアクションこそ、主体性であり、社会参画へとつなげていくことができる。

以上、『未来を拓く』とは、『今を主体的に生き抜く』ことなのである。

研究小主題
『知識・技能を習得し活用できる児童生徒の育成』

「今」を主体的に生き抜いていくための、問題解決力を育成する学習過程を、以下のように捉えた。①社会的事象を知る。②社会的事象についての課題（問題）を把握する。③課題（問題）の解決に向けて考える。④根拠をもとに判断（自己決定）する。⑤自己決定したことを自分の意思として表現（主張）する。

中学校部会では、この学習過程に沿って、研究小主題を次のようにとらえることとした。

(1) 活用学習をすることで、習得事項の定着を図る。

○①・②を習得Ａとする。

○③・④・⑤を活用Ａとする。＝「思考・判断・表現」する力を育成する場面となる。

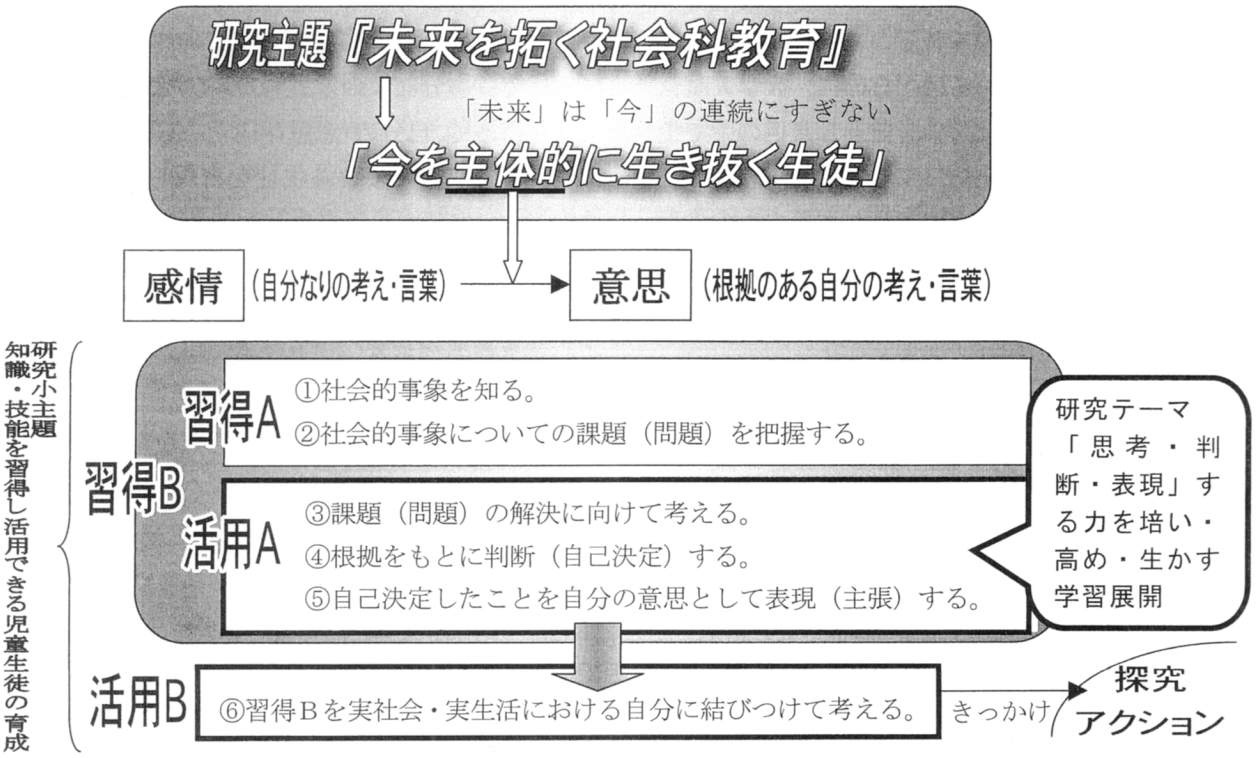
○活用Ａの過程が、習得Ａの定着を図る。

(2) 「今」学習したこと（＝習得Ｂ）が、実社会・実生活における「今」の児童生徒にとって、すぐに生きてはたらく（＝活用Ｂ）授業展開を図る。

○習得Ａ＋活用Ａ＝習得Ｂとする。

○習得Ｂを実社会・実生活における自分に結びつけて考えさせることを活用Ｂとする。

３．年次計画

１年次の研究（平成24年度）生徒の「思考・判断・表現」する力を 培う 学習展開	育成する力の具体化	社会がわかるための「なぜ、どうして」を解決していく力。		
	主な活用学習の手立て	複数の資料を比較して、問題の解決や主題を表現する。		
２年次の研究（平成25年度）生徒の「思考・判断・表現」する力を 高める 学習展開	育成する力の具体化		社会に生きるための問題「どうしたらよいか、どの解決策が望ましいか」を解決していく力。	
	主な活用学習の手立て		他者と異なる思考・結果を比較、検証する。	
３年次の研究（平成26年度）生徒の「思考・判断・表現」する力を 生かす 学習展開	育成する力の具体化			解決したい情報を発信していく力
	主な活用学習の手立て			問題解決のプロセスを見通して、思考や表現の段取りを考える。（プレゼンする）

引用参考文献（小原友行編著 「思考力・判断力・表現力」をつける社会授業デザイン）中学校編）